

序

若手医師と接する中で、肺や縦隔といった重要臓器を扱う胸部画像診断への関心の高さを感じる。彼らと一緒に読影を振り返る時に、「何か気になることはありますか?」と尋ねると、「これは正常ですか?」など、次々と様々な事柄を質問される。

多くの「気になること」の中には、「所見の表現」に関する悩みもある。具体的には、異常所見を認識した後、それを適切な用語で記述することや、そこから鑑別診断に結びつけることが難しく感じられる、などである。こうした一因には、用語の意味や成り立ち、そこから導き出される鑑別診断について十分理解できていない状況があるのかもしれない。実際には、画像所見がどのような病理像や病態を反映しているかを理解することが重要であり、必ずしもピンポイントで疾患を特定できなくても、病態や疾患の方向性が合っていれば臨床に大きく貢献しうる。

本書では、このような課題に応えるべく、胸部画像診断における「画像所見」をテーマに、それぞれの定義や背景、およびどのような病理像が反映されているかなどを総論でわかりやすく解説している。また、各所見に基づく鑑別疾患について、一般的なものから専門的な視点まで幅広く取り上げた。臨床現場では予期せぬ疾患が潜むことも多く、「稀だが考慮すべき疾患」を意識することが診断のカギになる場合もある。本書が適切な所見の把握や鑑別に役立ち、迅速かつ正確な診断、治療につながることを願っている。

最後に、本書の執筆にご協力くださった先生方、日々のカンファレンスとともに成長してきた医局の先生方、本書の制作を支えてくださった編集部の皆様、そしてこれまで執筆や診療の場で温かくご指導くださった恩師の先生方に心より感謝申し上げます。

2025年8月

香川大学医学部放射線医学講座

室田 真希子